

現代アートで大学を地域に開くことの意義と その可能性についての研究 ～現代アート展「船/橋 わたす」の開催を通じて～

研究代表者：西元 里佳子

研究協力者：小川 美陽・四方 遼祐・堀部 七彩・伊能 怜・岸田 なつき
谷口 遥香・丸山 拓真

目 次

1. 現代アート展「船/橋 わたす」とは
2. 研究の目的
3. 成果
4. 今後の展望・課題

1. 研究の目的

奈良県立大学地域創造学部西尾研究室では昨年に引き続き、2018年10月20日～28日にかけて、地域資源を発掘したり、異質なもの同士をつないだりする力を持つ現代アートの力に着目した展覧会を開催した¹⁾。展覧会名である「船/橋 わたす」は、本学が位置する船橋町の名にちなんで、さまざまな価値観をのせた作品という「船」を渡し、異質なもの同士をつなぐための「橋」を渡すというイメージで名付けられたものだ。

この展覧会の実施にあたり大きく3つの目的を設定していた。まずは、ゼミ活動の一環として、「アートプロジェクトの運営方法を学び身につけること」である。

私は、昨年の8月～9月に京都府文化交流事業「京都Re:Search2017 in京田辺」にアーティストとして参加した。そこでは、空き家が滞在の拠点として使用されており、アーティストが出入りを繰り返すことで、地域に開かれた場所となっていた。また、他の参加アーティストと交流し、ともに作品制作することで、様々な考え方に触れることができ、それぞれの視点での地域の在り方に気づくことができる。さらに、京都Re:Searchでは、「仕掛け人」がアーティストと地域を結びつける役割を担っていた。アーティストと地域を結びつける役割は、アートにおけるまちづくりが注目されている現代において必要であると考えた。

次に、「奈良県立大学を地域に開かれた場所にする」とおよび「奈良県立大学が文化の拠点なること」がある。アートNPO「ANEWAL gallery」でのインターンシップに参加した際、まちと協力しながらアートイベントの開催などを実施していたが、地域住民や役所とのすり合わせを何度もおこなっていた。よって、私はまちづくりを目的としたアートイベントはまちの理解と協力なくしては成功しないと感じている。この経験から、現代アート展「船/橋 わたす」を奈良県立大学で開催することで、奈良県立大学を地域に開かれた場所とし、まちの人たちが大学に興味をもち、地域創造学部にも所属する学生が考えていること、実践

していることが認知されることでこの奈良県立大学が、船橋の、奈良の1つの拠点となることを期待する。

2. 現代アート展「船/橋 わたす」とは

展覧会では、ゼミ生である3、4年生の学生による、研究の一環としての作品の展示に加え、学生のキュレーションによる外部からの招聘アーティストである3名の作品が展示された。学生の研究テーマは様々²⁾で、自身の家族関係の複雑さから家族とは何かについて向き合った作品や、手話による演劇作品でいきづらさに向き合った作品、写真をあぶったり日記を複製することで自身の忘れたくない記憶を焼き付ける方法についての実践などの作品があった。



写真1《下着における役割と形の再構築》
展示風景
小川美陽撮影



写真2《みえない家族》展示風景
小川美陽撮影

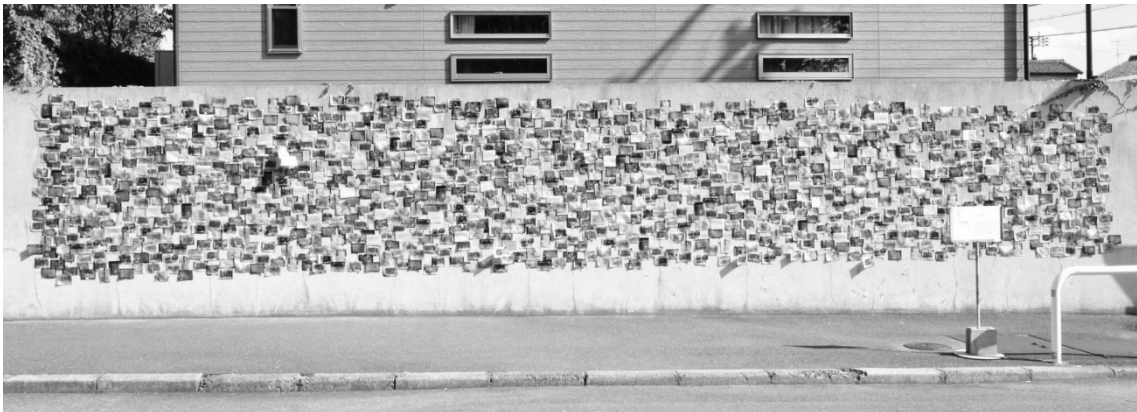


写真3《ネガ（記憶）》展示風景
小川美陽撮影

また、招聘アーティストの選定にあたり、大学に対する問題意識から、本学の状況を面白がってくれる人、自分達とは違うコミュニティの人、大学の地味な印象を明るくしてくれる人、芸術を専攻しない大学で開催することから「わかりやすい」人など様々な条件を考え、実際に、荒木由香里、井上亜美、光岡幸一の3名を招聘した。

荒木由香里は美術大学で教員もしており、既製品から作品を制作するアーティストであ

る。視覚的にインパクトがあるため、この大学の印象を変えてくれることを狙って招聘した。今回の作品では、附属図書館で廃棄予定の書籍にミラーフィルムを貼ったものであり、展示場所は地域交流棟3階で、カフェが入る予定だったが、結局空きスペースになっていた場所を利用した。作品制作にあたり、積極的に学生や図書館司書と交流し、展示場所を学生と一緒に掃除するなどした。



写真4 《帆、あるいは雲》展示風景
小川美陽撮影



写真5 《帆、あるいは雲》展示風景
小川美陽撮影

井上亜美は猟師資格を持つアーティストである。東日本大震災にともなう原発事故以来、猟師を引退した祖父が猟師生活を語り、心情を浮かび上がらせる映像作品を、普段使われていない部屋を暗室として利用し展示した。自らの生活のフィールドから問題意識を生み出し、FWを通して研究するスタイルは私たち奈良県立大学生と同じものがあり、多くの学生が興味深く鑑賞していた。

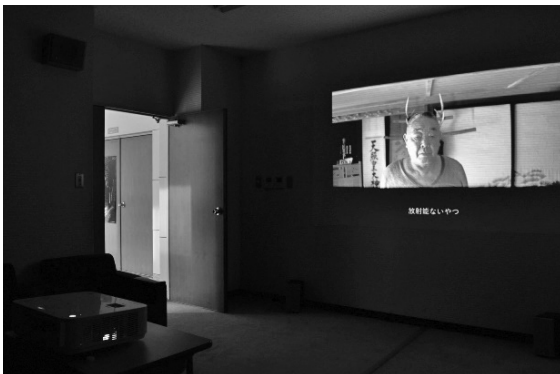


写真6 《猟師は猛獣の夢を見る》展示風景
小川美陽撮影



写真7 《まなざしを さす》展示風景
小川美陽撮影

光岡幸一は、様々なことを面白がり、おせっかいを試みるアーティストである。奈良県立大学には公式SNSがあるが、学生に認知されず忘れ去られていた。またSNSに掲載されているロゴマークでさえ昔のままで、ほったらかしにされていた。ただ、小松原先生だけが唯一そのSNSを活用していた。光岡はその状況を逆手にとり、URLを書いた大きなバナーを学校中に添付した。そこにアクセスし最新トピックスをみると、小松原先生の研究室に

案内され、研究室では作品の解説と小松原先生のサインがもらえる。また、他にも作品を
 発表した、ボランティアの学生と積極的に制作をすすめ、学内の多くの人が名前すら知
 らない掃除のおばちゃんへインタビューをするなどした。



写真8 《sns.narapu.ac.jp》展示風景
 小川美陽撮影



写真9 《sns.narapu.ac.jp》を通じて小松原
 先生と交流する学生の様子
 小川美陽撮影

3. 成果

昨年度は初めての試みで、展覧会を成立させることで精いっぱいになり、教員にたよる
 部分が多かったが、今回の「船/橋 わたす」は2年目の開催だったこともあり、学生が展
 覧会をどのようなものにするのか丁寧に話し合い、アーティストとのやりとりも学生が主
 体的に行うことができた。他にも、事前の文献講読も実施した。このように、招聘作家と
 のやり取り、当日に向けた設営などで、展覧会に運営者として関わる中で、アートプロジェ
 クトの運営方法を学んでいった。

また、先述の通り、本展では、芸術系の学部・学科のない奈良県立大学で学ぶ学生の研
 究作品と、学生自身のキュレーションによる3名の招聘作家——荒木由香里、井上亜美、
 光岡幸一——の作品を本学に展示した。これは、学生と招聘作家が生み出す現代アートの
 力が本学に加わることで、観る人に新たな視点を提供したいと考えたのだ。ゼミ生がボラ
 ンティアスタッフや招聘作家経由で来場したアーティストや専門家と作品について直接意
 見交換できた。ゼミ内で作品の講評会を実施した際には、若手芸術家の作品を雑誌に取り
 上げ編集を行う男性が自主的に講評会に参加し、丁寧に作品に対して意見してくれた。ま
 た、奈良県立大学に通うシニアカレッジや学生、掃除のおばちゃんや警備員、他のゼミ生
 は人数も少なく、大学も狭いにも関わらず、交流もなくお互いが何をしているのか全く知
 らない。しかし、今回の「船/橋 わたす」をきっかけに、他のゼミが展覧会を鑑賞しに来
 たこと、普段交流することのなかった他のコモンズの教員から意見をもらい、同時にその
 教員のゼミ活動について知り、熱い議論を交わしたこと。招聘アーティストの作品の中で、
 全く知られていない奈良県立大学の公式SNSを取り上げ、アクセスすると最終的に小松原
 先生の研究室へ行くことができるものがあったが、そこでも普段あまり話す事のなかった
 小松原先生と、大学周辺の地理の歴史や状況について教わることができた。このように、
 お互いを知らなかった学部生同士が交流したりと、新しいコミュニケーションが生まれた。

また来場者の中には去年来場し、今年も来場してくれた方や、今回の来場をきっかけに他の展覧会や舞台公演に足を運ぶようになったという方もいる。そういう意味では、今回の「船/橋 わたす」は、文化交流のきっかけになったのではないだろうか。

最後に、奈良県立大学を地域に開き、地域の人が大学に興味を持つことを目的として掲げたが、実際には、直接訪問や地元ラジオ出演といった広報活動、受付の設置場所の工夫で多くの人の関心を引くことを心がけた。また、作品の中には物理的に大学を外に開いたものもあった。実際に多くの人が展覧会に足を運び、今年度の来場者数は400名にもなった。できるだけ鑑賞者から作品の感想を聞こうと、ゼミ生を中心にできるだけ鑑賞者に作品の解説を行ったため、様々な想いや感想を聞くことができた。なかでも、会期中に出会った大学のすぐ近くに住んでいるというあるご年配の男性からの「かつての遊び場に久しぶりに来た」という感想が印象的だ。戦前、戦後にかけては、奈良県立大学のかつての姿の学校は、地域の人にとって自由に出入りすることのできる「遊び場」だった。しかし、大学になった今は出入りしづらくなり、その名残を垣間見ることさえない。今回の展覧会をきっかけに、会期中の期間においてではあるが、多くの人が奈良県立大学を知り、出入りすることになった。

4. 今後の展望・課題

もちろん、日常的に開かれた大学を目指すには、まだまだできることはある。今回は、展覧会の会期中においてのみ大学は開かれたものになり、学内でも交流が生まれた。しかし、大学とは日常的に地域に開かれ、地域と共にあるものだと私は考える。地域創造を専門に学ぶ奈良県立大学はなおさら地域に開かれるべきである。そのためには、日常的な周辺地域との結びつきや関りが必要不可欠であると考ええる。今回の展覧会では、「大学を開く」ことにフォーカスし、広報などより広い範囲へのアプローチを実施した。一方で、大学周辺へのアプローチはほとんどできていない。現代アートという一見してわかりにくい手法を通じて大学を地域に開くことを考えると、次年度以降は学内で展示し、来てくださいというスタンスではなく、ゼミ会議を周辺のお店で実施するなどの日常からの関係づくりや、商店街のお店の場所を借りて展示すること、ミュージアムショップとして船橋商店街を位置づけるなど、私たち自身が大学から出ていくことも考えねばならない。

また、先述の通り今回の「船/橋 わたす」の会期中において奈良県立大学の学内で交流が生まれたが、目的として掲げていた「奈良県立大学が文化交流の拠点となる」ためには、これから先、継続して展覧会をはじめとして様々な試み続けることで3年4年かけて初めて実現する長期的なプランであると考ええる。

これからも現代アートを通じて、奈良県立大学が地域の新しい「港」となり、大学と地域、アートと日常生活を、「船/橋わたす」ことを目指して、考え続けていきたい。

脚注

1. 現代アート展「船/橋 わたす」の開催について

会期：2018年10月20日（土）～28日（日）

主催：奈良県立大学 地域創造学部 西尾研究室

後援：奈良市

協力：東山アーティスト・プレイスメント・サービス（HAPS）

2. 学生の作品テーマは以下の通りである。

景観としての文字

私の障害者芸術

手話演劇から考察する生きづらさの実態

みえない家族

生き物になった建物

ネガ（記憶）

生活の演劇

下着における役割と形の再構築

プライベートメッセージ